

アンチ「アンチ・アンチエイジング」

小 泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



夏に、高校の同期会があった。同じテーブルに座って、かなり久しぶりに会う方たちや、時々会っていた方たちと話をした。よく言われているように、同級会、同期会、同窓会などで会う時、若い頃は「学校や仕事の話（恋愛や友人の話もあるか）」、その次は「家族の話」、そしてその後は「自分の病気の話」が主になってくる。今回は、当然であるが、それぞれ、いろいろな病気の体験を語り合った。治療中の方もいれば、過去の病気のことを話す方もいた。いくつもの闘病体験のある方もいた。言えることは「こうして会えたのが、幸せ」ということになる。

お互いを見て「ちっとも変わらないねえ」などと言い合うこともある。集団の外側から見れば、「十分、高齢者の集まり」であろうが、不思議である。一緒に会話をしている最中に、お互いのちょっとした表情やしぐさに、学生時代のそれらを発見して、そこを注視して全体が見えなくなるのかもしれない。また思い出という認知バイアスが影響して、そのような感想になるのかもしれない。

上野千鶴子さんの「アンチ・アンチエイジングの思想～ボーヴォワール『老い』を読む～」という本を読んだ。今、世間では「アンチエイジング」なる商品や技術が魅力的に宣伝され、医療の分野でも見られる。医学においては、「予

防医学」として健康寿命延伸などを主目的にするのが本流ではあるが、薬物やサプリを使って加齢に抗おうとする治療もある。

そもそも、高齢になるということがあたかも「悪」、高齢者はあたかも「迷惑」と考えられるようになったのは、文明の近代化のせいであるという。以前、NHK「チコちゃんに叱られる！」で常連の解説役である民俗学者の新谷尚紀先生に、秋田県医師会でご講演いただいたことがあった。新谷先生によると、「昔は、長く生きた者はそれだけで（長寿自体が貴重であったことや持っている経験値から）尊敬を受け、長寿者に触れてその方の持つ『気』を受けようとした」とのことであった。

上野さんは本の中で、「老人の地位は近代化とともに低下したのである」と述べている。近代化は、文明を進化させ、長生きができるような生活環境、医療技術を高度化させてきたのに、その結果は皮肉なことになったのである。

上野さんは疑問を投げかける。生産性が低いとか、生産性がないっていけないことであろうか。老いは恐れなければいけないものでしょうか。厄介をかけてはいけないのであろうかと。

誰もが必ず老いるのであるが、それを恐れ、それを認めることができないのは、近代化した社会が老いを容認していないからではないだろうかと言う。「老いが不幸というのは、社会の

責任である」とも言っている。そして、不自由な点があっても、健康面で満点でなくても、本人が望めば社会の中で暮らしていけるようにするべきだと主張している。また、「介護と介助の違い」についても語っていて、介助には本人の意思が働いており、本人がしたいことや動きたいことに、周囲がどのように伴走してあげられるかが重要になるとしている。

確かにそうだと思う。しかし、私自身を振り返れば、少しでも健康で活動的でいたい。少しでも楽しさを感じたいし、いろいろなことに興味も持ち続けたい。不自由になれば、介助をお願いできるような意識状態のままでいたい。これもアンチエイジングの考えなのかもしれない。アンチ・アンチエイジングで言っている「老いをそのまま受け入れる」ことについては「そうだなあ」と思う反面、老いに抗う自分もいる。上野さんのようにきっぱりと考えることはできない。

ついでに、友人から勧められていた映画「PLAN75」（早川千絵監督 2022年）をDVDで鑑賞した。ご存知の方も多いと思うが、近未来（それほど遠くない未来）の日本のこと。少子高齢化が今より進んで、高齢者はますます「多すぎる」、「若者に迷惑をかけている」、「かけるかもしれない」存在となっている。物語はその時代の国会で「満75歳になったら、生きるかどうかの選択をする」という法律ができたというものである。自ら生の継続をやめる選択をした場合に、自由に使える10万円というお金がもらえたり、お葬式や死後の整理を公的機関がやってくれる。最初の頃のことは物語で描かれていなかったが、恐ろしいのは、徐々にその選択に向くように世の中が強要してくる風潮になることである。個人の選択であるとなって

いるが、実は社会からの圧力が高まっていくことが描かれている。ご覧になっていない方のために、主人公たちの選択はここでは紹介しないが、そこで描かれている社会状況からすると、映画の終わりの後も続いていく主人公たちのこれからが心配になった。なかなか恐ろしい世界である。私もそうであるが、誰もが「自分が老いていく経験」は初めてになるので、今より老いた自分を本当には想像できないし、無意識に想像したくないとしていると思う。これもアンチエイジングになるか。

結局、私はアンチエイジングなのか、アンチ・アンチエイジングなのか。上野さんの本を読んだ直後、しばらくその考え—アンチ・アンチエイジング—の中で生活してみた。

「自然に逆らわない」、「老いていく自分を受け入れる」、「生活が立ち行かなくなること」を予測して、今後介助の依頼ができるように今から準備していく」などを思ったが、何となく自分の元気がなくなるような気がしてきた。私の周囲のスペシャル元気な友人たちには負けるが、私も好奇心旺盛でいたいし、人に会っておしゃべりしたり、美味しい物を食べたり、みっともない程度におしゃれもしたい。母は晩年まで仏壇の父にお茶をあげる時に「まだお化粧していないから」と私に頼んだりしたものであった。

というわけで、私は上野千鶴子さんの社会学としてのアンチ・アンチエイジングには賛成である。しかし、個人的に自分の心の欲求に目を向けると、薬剤などを使ったり、自分に似合わない装いでアンチエイジングはしないが、気持ちとしてはやはり今のところはアンチエイジングでいたいようである。